

視覚障害「Sight World」 聴覚障害「字幕付与技術シンポジウム」

2つの障害支援技術イベントから

注目した障害支援技術イベントの一つは「日本点字の日」である11月1日から3日まで都内で開催された「Sight World」。視力の英訳であるSightを冠するイベントでは、視覚障害者の支援機器の展示会やセミナーを4年ぶりに開催。もう一つは、京都大学 情報学研究科 河原研究室が主催する「聴覚障害者のための字幕付与技術シンポジウム」で、11月11日に学内ホールで5年ぶりに開催された。この2つのイベントから編集部として注目した内容をショートレポートする。

(レポート・写真:吉井 勇・本誌編集部)

① Sight Worldから

Sight Worldで行われた映像作品上映会に参加した。筑波技術大学で学ぶ視覚障害の学生た



ちが監督したショートムービー『Eyeself〜ワタシノセカイ〜』は、主演を演じた学生自身の視野狭窄の世界を伝えるもの。

学生たちの指導教官である鶴見昌代准教授は「視覚障害のある学生による視覚障害の世界を伝える映像作品の制作」を考え、映像制作のプロ集団である日テレ アックスオンでクリエイティブディレクターとして活躍する大学時代の先輩、藤重道治氏に協力を相談した。ここから、見えづらさのある障害学生たちによる映像制作が動き出したのである。

視覚障害の学生たちが映像を作りたいということにちょっとした違和感があった藤重氏は「僕の信じる映像の力を伝えました。映像ってなんでも伝えたいことを伝えられるんだぞ! と。その上で彼らの動機の奥底と向き合い、弱視の世界を映像で表現して伝えたいという彼ら自身の気持ちに醸成されていったのです」と、映像制作のプロとして、制作手法の指導ではなく、作品づくりの基本から向き合わせたという。

完成した映像作品に音声ガイドを付けたのは2023年

度の4年生たちだ。日テレ アックスオンの字幕・解説放送制作メンバーらは藤重氏の取り組みを知ったことで、サポートを自主的に申し出たという。健常者に視野狭窄の世界が伝わるように作った映像作品に、今度は4年生の3人が視覚障害者に言葉で伝える音声ガイドづくりに向き合うことをサポートしたのである。

学生たちの初めての挑戦に、プロデュースから撮影、音楽、大道具などの全分野に、藤重氏は超一流のスタッフを結集させた。「前例なき道を暗中模索で切り拓く怖さとそれを超える楽しさは、見えづらい世界を前に、止まらず進むのどどこか似ているのだろうか。それを一緒に体感できた出会いの日々だった」と藤重氏は振り返る。日テレ アックスオンというプロダクション会社の「自由な真剣さ」と、筑波技大の学生たちの真摯な学びを知った上映会であった。

② 京大・河原研究室主催「字幕付与技術シンポ」

「聴覚障害者のための字幕付与技術シンポジウム」を開催した河原研究室は、2011年から衆議院に導入さ



れた新しい会議録作成システムの自動音声認識技術を提供した。河原達也教授は「新型コロナ下を含む2018年から2023年の5年間で、オンラインの会議や講義が広がり、情報保障もオンライン対応となってきました。同時にAI技術の進展で音声認識の進化となり、マイクロソフトのPower PointやZoomなどの自動字幕付与が導入され、学会発表やテレビの字幕放送の制作でも活用されてきました」と変化を指摘し、「5年前の音声認識の精度と比べ誤り率が概ね半減し、時間の遅れなく提示できるなど、一般の人も使えるレベルになってきています」と話す。

5年ぶりの会場では、「大学における聴覚障害学生支援」や「オンライン会議システムを用いた字幕付与」、「テレビ放送における字幕付与」の現在が報告された。

今後、字幕付与は音声認識のAI技術をどう生かしていくか。河原教授は「今後の進化スピードを考えると大いに期待できるが、外部の雑音が多い環境での収録や人名・商品名などの固有名詞、専門用語への対応は理解する上で致命的な弱点ではないか」と、日本語の難しさを懸念。この実証のためのAI実験のフィールドがほしい。